七面山物語

～早川町との関わりを考える～

文=望月 一仁

七面山の表参道

「七面山」は日蓮宗の主要霊場として知られ、総本山・身延山を守護する鬼門除けの位置にある霊峰だ。山上に建つ敬慎院（本社）には、七面大明神が祀られている。

この霊山は、本社を含む一部が行政区画上、身延町の飛地だが、地理的には早川町内にある。そのため、山麓の町内地域とは、古くから深い関わりを持ってきた。

平安時代には、修験道の修行場であったとされ、山の二丁目にある神力坊等にはその名残が見られる。鎌倉時代になってからは、七面大明神よりも前に、雨畑の人々によって池大神が祀られた。その後、日蓮聖人が身延山に入山し、七面山は日蓮宗の霊場となっていく。江戸時代以降には参詣者が増え、宿場町として赤沢が賑わった。さらに登拝できない人のために、代替となる霊場が樽坪や大原野などに作られた。

本稿では、七面山をめぐる時代ごとの様相の変化を踏まえながら、町内地域とこの霊峰との関わりを詳しくたどっていく。

日蓮登場以前の七面山

七面山が日蓮宗の霊山となる以前は、特に平安時代において、修験道（※1）の霊場となっていたと考えられる。というのは、まず、奈良県の大峰山脈にある修験の霊峰「大峰七面山」との関連性の指摘がある。山名の一致に加え、山容の険しさや山中に池を持つ点など類似点が極めて多い。両山の間に信仰上のつながりがあった可能性があり、大峰七面山の真言宗系の修験道が七面山における信仰に影響していたことが考えられる。

一方で、山の二丁目にある「神力坊」や山麓の小縄にある「十萬部寺」などに「妙法両大善神」が祀られている。この神はもとは天狗であるとされており、天狗は関東地方の修験道の主要な信仰対象だ。そこから七面山には真言修験と関東修験の影響が入り混じった信仰の形が存在していたと考えられている。

七面山とその山麓には、修験道と関わりのある痕跡が点在している。それらの由来は明らかでないものの、山と地域との関わりが古くから存在していたことを感じさせる。

池大神と雨畑の信仰

山上の敬慎院（本社）の境内には、「池大神」を祀る「池大神宮」というお堂もある。この神は、鎌倉時代、七面大明神よりも前にこの地に奉安（※2）されており、いわば地主神のような存在だ。

この池大神がどこから来たのかは、雨畑に伝わる次のような伝承によって語られている。

1221年（承久3年）の秋、雨畑村の高岸源左衛門が狩りの途中、稲又川の滝壺に鹿を見つけた。仕留めようとした瞬間、鹿の姿は消え、代わりに光を放つ二寸ほどの仏像が現れた。その荘厳な姿に懺悔の心が生じ、殺生を止めこれからは神仏を祈ろうと誓い、仏像を持ち帰った。

村の名主である望月六左衛門に相談すると、自身の家に祀るべきとの助言を受けて、源左衛門は屋敷内に仏像を安置した。すると清水が湧き出す功徳があったという。

やがて源左衛門の夢に「東の高山（現在の七面山）に祀るべし」とのお告げがあったため、仏像を山上へと勧請する（※3）こととなった。1222年（貞応元年）、源左衛門は登山し、四十丁の平地に社を建てて仏像を祀った。するとその夜「さらに八丁奥の池の畔に祀れば、雨畑村は永く守護される」との新たなお告げがあり、社はそこに移された。これが池大神の起こりとされ、以後、雨畑の人々が守り、祭礼も行われてきた。この登山祭典は、現在では途絶えているが、約50年前にはまだ続いており、本社内の「雨畑座敷」と呼ばれる間に通されていた――そうした話を、雨畑の住民の方から聞くことができた。

一方、最終的に仏像を祀るお堂が、稲又（雨畑内の地域）に移されたと語られている類似の伝承がある。当時の場所とは多少異なるものの、こちらにも現在「御池大明神」のお堂があり、毎年4月には地域住民によって祭礼が続けられている。

また、本村（雨畑内の地域）には源左衛門が住んでいたとされる「高岸」の屋号をもつ家が残り、近くには仏像を祀った際に湧き出たという清水も存在する（2024年の冬にも湧水が確認された）。これらの話の真偽は定かではないが、数百年前の出来事が今も地元の記憶と風景に息づいていることは、七面山と雨畑の深い結びつきを示しているだろう。

七面山開創と赤沢・雨畑との関わり

池大神宮が祀られた1222年（貞応元年）の後、1274年（文永11年）には日蓮聖人が身延山に入山し、1277年（建治3年）に七面大明神が姿を現した（※4）と伝えられている。そして聖人入滅後の1297年（永仁5年）、高弟の日朗上人が宗祖（※5）の遺命を受け、地元の有力者・波木井実長とともに七面山へ登拝。七面大明神を山上に祀ったこの出来事が、七面山開創（※6）の起源とされている。

この開創の過程には、赤沢にある「妙福寺（当時は妙福庵）」との関わりが語られている。1297年9月17日、登山に先立って上人一行は妙福庵を訪れ、草鞋を脱いで一息ついた。その折、七面大明神勧請の経緯と法華経の教えを語り、真言宗であった庵はこれをきっかけに日蓮宗へと改宗したという。

その夜を庵で過ごした上人は、翌18日早朝に村人6人の案内を得て山へ入った。山頂では池を見つけ、ここを七面大明神の鎮座地にふさわしいと定め、日蓮聖人から託された釈尊の立像を安置した。この時建てた仮のお堂は立木を組み、熊笹で覆った簡素なものだったが、19日の朝には完成し、供人が持参した粟餅を投げて上棟式が行われた。この日が七面大明神の縁日とされ、現在も大祭が営まれている。

（※1）修験道とは、山中での厳しい修行を通じて加持力や悟りを得ようとする日本独自の山岳信仰
（※2）安置してたてまつること
（※3）七面大明神を七面山上に祀ること
（※4）日蓮聖人が身延山で法華経を説いていた際、見知らぬ美しい女性が熱心に聴聞していた。聖人が正体を尋ねると、女性は龍へと姿を変え、自らを七面山の守護神・七面大明神と名乗り、法華経と身延山を守護することを誓ったと伝えられている
（※5）日蓮聖人を指す
（※6）七面山を信仰の場として始めることを指す

七面山に関する主な略年表

時代・西暦		主なできごと
平安時代		七面山は修験道の山として信仰を集める
鎌倉時代	1222年	雨畑の人が七面山上に池大神の社の建立
	1274年	日蓮聖人が身延山に入山
	1277年	七面大明神の示現
	1297年	七面山の開創、赤沢の妙福寺（妙福庵）が真言宗から日蓮宗に改宗
室町時代	1450年（前後約10年の間）	赤沢の妙福寺が七面山上に七面大明神のお堂の建立
	1496年 (*1)	雨畑に正徳寺が創建
	1563年（前後約10年の間）	妙福寺から譲り受けた七面堂を本格的社殿として完成
桃山時代 安土		
江戸時代	1616年～1623年の間(*2)	赤沢の妙福寺が七面山・初代別当就任「鍵取り妙福寺」となる
	1619年	徳川家康の側室お万の方が七面山へ登拝女人禁制を解く
	1651年 (*3)	七面山の所有権について七面山が身延村のものであるとの判決
	1671年 (*4)	樽坪に北の池七面宮の建立
	1763年 (*5)	大原野に大原野七面堂の建立
	1776年	七面山敬慎院が大火で全焼
	1780年	七面山敬慎院の再建

年表は『新装復刊 七面大明神のお話〈本編〉』の略年表を参照。これ以外を参照しているものは次に示す
(*1)早川町誌(*2)身延24世顕是院日要上人の代で赤沢の妙福寺が七面山初代別当になるとの記述あり（『七面大明神縁起』p.109）、日要上人が身延24世に就任したのが1616年、亡くなったのが1623年（『身延山史年表』p.119～p.120）、同年新たに別の上人が25世に就任したことから年代を推定(*3)『身延山信仰の形成と伝播』p.269(*4)早川町誌(*5)早川町誌

関連バックナンバーNo.31

七面山の由来や信仰の成り立ちなど、大まかな全体像をつかめる入門編的な回。

全文（PDF）

七面山開創の背景には、赤沢の人々の受け入れや協力があったことがうかがえる。その関わりは、霊山関連の年中行事への参加などを通じて、今も集落の中で静かに受け継がれている。

一方、この開創に際して赤沢に立ち寄ったとされる日朗上人は、雨畑にも足を運んだという伝承がある(※7)。上人が河原で偶然見つけた石が、硯に適した上質なものであることを見抜いたとされ、これが後に「雨畑硯」として知られるようになったという話だ。また同地には、行燈の燃料となる荏油の荏を栽培して上人に献上していた家があり、その功により上人直筆の曼荼羅とともに「荏本(エノモト)」の姓を授けられたという口伝も残されている(※8)。

さらに、1496年(明応5年)には、日蓮宗の寺院として雨畑に「正徳寺」が創建され、現在まで続いている。地元の方の話によると、かつてこの寺院は妙福寺に匹敵するほど七面山との関わりが深かったといい、そうした記憶は今も地域に語り継がれている。

山頂所有権をめぐる争論

七面山山上にはすでに雨畑の人々によって池大神を祀る池大神宮が建立されていたが、室町時代中期には赤沢の妙福寺が七面大明神を祀るお堂を建てた。当初は参拝者も少なく大きな衝突は無かったが、信仰が広まるにつれ、山頂の土地所有を巡って両集落間で争いが発生。

当時の役人の判断により「日蓮聖人の前に現れ、守護を誓った神が祀られていることから、七面山は久遠寺のある身延村に属する」との裁定が下され、今日も身延町の飛地となっている。敬慎院となる社殿は、妙福寺から譲り受けたお堂をもとに整備が進められ、室町時代後期には本格的に完成した。

なお、この社殿の整備が進められる中、池大神宮も手入れされ大切に守られてきた。本社に比べれば規模は小さいものの、このお堂も今なお山上にその姿をとどめている。

江戸時代の参詣ブームと赤沢宿の賑わい

江戸時代に入ると、日蓮宗の信仰が篤かった徳川家康の側室・お万の方が七面山に登ったことで女人禁制が解かれ、この山の名を世に広める契機となった。江戸時代中期には、寺社参詣を兼ねた旅が庶民の間で流行し、七面山も多くの登拝者を集めるようになる(※9)。

参詣の主要ルートは、身延山から続く往復道(身延往還道)で、両山の間にある赤沢は宿場町として発展。宿や食事提供などで参詣者たちをサポートしたり、本社へ物資を運搬したりするなど七面山に関わる生業は集落の暮らしを支えていた。

七面山と早川町内の主な関連地

搏坪と大原野で七面山に代わるお堂の建立

七面山への信仰が広がるにつれ、登拝が難しい人々のために、山に登らずとも同じご利益を得られるという、本社の代替となるお堂が全国各地に建てられるようになった。これらは「うつし霊場」と呼ばれる。

早川町内にも代表的なうつし霊場があり、搏坪に「北の池七面宮」が、大原野に「大原野七面堂」がある。いずれも池や参道、七面大明神像など七面山を構成する要素が多く再現されており、現在も集落の人々によって大切に守られている。

搏坪と大原野のうつし霊場は、本社を訪れることが難しい人々の思いを受けとめる場として、七面山信仰の広がりを支えてきた。

関連バックナンバーNo.59

江戸時代から近世における、七面山参詣の様相を詳しく紹介している回。

全文(PDF)

現代の関わりと信仰の継承

七面山は霊山としての存在を保ちながらも、その在り方や地域との関わりは、時代とともに移ろいを見せている。

昭和に入り、登山口までバスが乗り入れるようになると、身延山から七面山に向かう徒歩での巡礼は減少し、赤沢の賑わいは静まっていった。しかし現在も七面山への参詣者は一定数いる。

最盛期より減りつつも、赤沢をはじめ羽衣や角瀬などでは、宿や食事提供といった施設があり、参詣者の登拝を支えている。これらの地域と、七面山で行われる大祭や元旦の初開帳(コラム鍵取り妙福寺)などに代表される宗教行事との関わりは続いていて、雨畑や搏坪など、七面山ゆかりのお堂を持つ集落でも、お堂にまつわる年中行事が受け継がれている。こうした行事は、信仰だけでなく、地域の文化としても意味を持っている。

住民の高齢化や後継者不足により、こうした営みの継続が難しくなっている集落もあるが、七面山をめぐる記憶は、今も地域のあちこちに息づいている。その歴史や文化を知り、継いでいくことは、この町の未来をともに育んでいく力になるだろう。

記事監修=望月 真澄

身延山大学特任教授。日本仏教史(特に日蓮宗)を研究。現在、全国の寺院に伝わる古文書・絵画、彫刻等を調査し、整理・保存活動を展開中。著書「近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰」「江戸の法華信仰」等多数。

参考文献

○森宮義雄『新装復刊 七面大明神のお話〈本編〉』仙妙書坊(2025年)
○森宮義雄『七面山』身延・七面山敬慎院(1965年)
○森宮義雄『七面大明神縁起』七面大明神奉賛会(1960年)
○望月真澄『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院(2011年)
○身延山短期大学佛教文化研究所編『身延山史年表』身延山久遠寺(1985年)
○身延町誌編集委員会編『身延町誌』身延町役場(1970年)
○早川町教育委員会編『早川町誌』早川町(1980年)

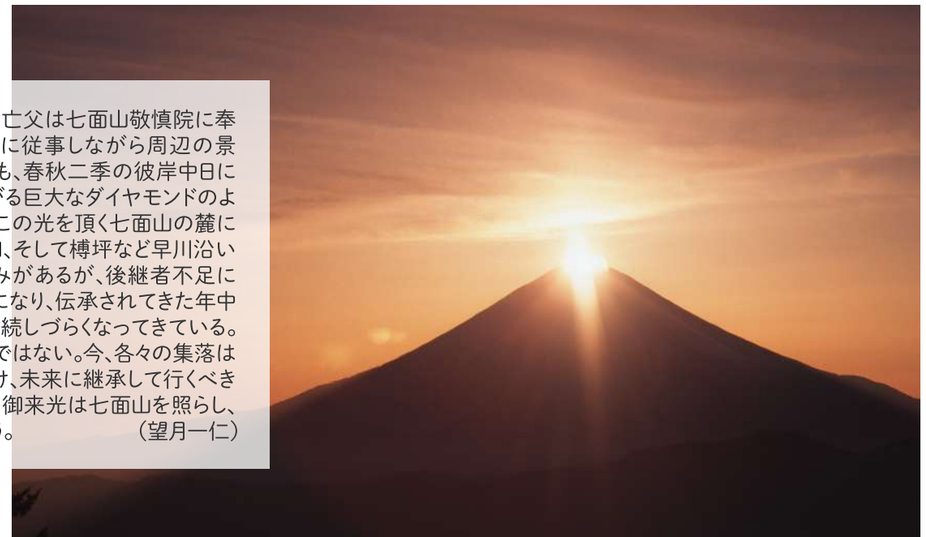
(※7)日朗上人のエピソードについては、雨畑硯の博物館である「硯匠庵」の公式ウェブサイトによる説明で確認。ただし、硯石の起源に関しては諸説あり
http://amehata.suzurinosato.com/amehata.html
(2025/7/28閲覧)
(※8)荏本家と親戚関係にある雨畑の住民の方から聞いた話による
(※9)一方で、日蓮宗の修行の一環として、七面山の厳しい自然環境を生かした「荒行」と呼ばれる修行も行われるようになり、僧侶にとっては重要な修行の場として位置づけられていった

column

鍵取り妙福寺

赤沢の妙福寺(17世日照上人の時代)は、管理していた七面山と6つの坊(宗説坊・神力坊・蓮華坊・肝心坊・中適坊・晴雲坊)を、身延山(9世日学上人の時代)に寄進したことで、敬慎院の初代別当に任命された。以後、敬慎院の鍵を代々預かる「鍵取り寺」となり、元旦の初開帳では妙福寺の住職が儀式を行い、鍵を別当に引き渡す役目を担っている。

敬慎院から望む富士山のご来光



筆者あとがき

筆者の亡父は七面山敬慎院に奉仕する職に従事しながら周辺の景色を撮影して残した。中でも、春秋二季の彼岸中日に富士山頂中央からせり上がる巨大なダイヤモンドのような御来光は圧巻である。この光を頂く七面山の麓には、本稿で取り上げた雨畑、そして搏坪など早川沿いに連なる数々の集落の営みがあるが、後継者不足により現生活の維持が困難になり、伝承されてきた年中行事の担い手も減少し、存続しづらくなってきている。赤沢の元旦初開帳も例外ではない。今、各々の集落はその歴史や文化に目を向け、未来に継承して行くべきである。そうすれば、富士の御来光は七面山を照らし、地域を見守ってくれるだろう。

(望月一仁)